たとえば俺が、チャンピオンから王女のヒモにジョブチェンジしたとして。

藍藤 唯

ファンタジア文庫

2998

口絵・本文イラスト　霜降（Laplacian）

――コロッセオ。それは円柱をくりぬいたような鉄の牙城。
しかして人々の目が向くのは、外ではなく内。広大なフィールドに舞うは熱砂。火花を散らすは鉄と鉄。歓声は都度響き渡り、蒼天に突き抜けるが如く弾けてゆく。
闘う剣士は一対一。獰猛な牙を剝き、互いに互いを倒さんと銀の刃を閃かせる。
蝶のように舞い、蜂のように刺すレイピア使い。重剣を振り回し、相手諸共大地を割らんとする大男。異国情緒漂う反り返った刃を片手に、流麗に立ち回る武人。
皆一様に華があった。
この地に集った者であれば、大地に立つ者も見下ろす者も、同じく戦いに熱狂した。
観客は口々に、誰が強いかを語り合った。誰が一番優れているかと激論を交わした。
だが、彼らの言葉の中には暗黙の了解があった。
――そう。ただし、一人を除く、と。
『勝者、チャンピオン・フウタ！』
本日最後のプログラム。
無論それはトーナメントを勝ち抜いた挑戦者と、王座を防衛するチャンピオンの戦い。
だが、およそ最終決戦には似つかわしくないほど目立つ空席と、漏れ出るような落胆の溜め息は、本来あるべきチャンピオン防衛戦の決着とはかけ離れた光景だった。

昨日にあった、チャンピオンに挑む挑戦者を決める戦いの方が圧倒的に盛り上がった。
観客たちは〝事実上の決勝戦〟と揶揄しながらも、闘剣士たちの紡ぐ戦いに没頭した。
砲撃のような歓声が巻き起こり、勝者を賞賛し敗者をねぎらった。
今日は違う。どうせこうなると思った、とでも言うような呆れ交じりの雑音は、歓声とは呼び難い。フィールド中央に立つのは、一人の青年。いつものようにフィールドへと投げ込まれるゴミを眺めながら、それでも尚諦めのつかないような表情で俯く。
慣れきった光景だった。
『お前は闘剣士ではない』『個性のないパクり野郎』『挑戦者を虚仮にする戦い』
エトセトラ、エトセトラ。
手を振る気力もなく、まるで敗者のように彼はフィールドを去っていく。
その背に、聞き知った声が響いた。いつも、自分に挑戦してくる、永遠の第二位。
或いは、〝事実上のチャンピオン〟などともいわれる、一番人気の闘剣士。
振り返れば、彼は血を吐くようにただ一言、こう言った。
「次は、絶対に勝つ！」
その言葉に返事をしないのは失礼だ。だが、もう、何と言えばいいのだ。
――十日前も、二十日前も、三十日前も、聞いた台詞だというのに。

鍛錬を積んだ。デビュー当初は、これでもそこそこ期待された。
鍛錬を積んだ。相手と同じ武器を使って勝つことが、批判され始めた。
鍛錬を積んだ。同じ武器などではなく、そもそも戦闘スタイルを模倣していると知ったコロッセオの常連たちが、フウタを叩き始めた。
鍛錬を積んだ。対戦相手を愚弄する行為だと、指を差して罵られるようになった。
鍛錬を積んだ。最高位の闘剣士たちに交じっても同じことの繰り返しだ。彼らのファンが、フウタのアンチになった。
鍛錬を積んだ。誰もフウタに勝てなくなった。観客が苛立ちをぶつけるようになった。
鍛錬を積んだ。彼の戦いは、次第に観られなくなっていった。
そして最後に吐き捨てられた。
『〈無職〉の癖に』と。
フウタは、〈無職〉だった。
この世界では、ありとあらゆる人間に〈職業〉という力が宿っている。皆が皆、生まれ持つ〈職業〉によって得意なこと苦手なことがあり、天職を探し適材適所生きていくのだ。
しかし稀に、〈職業〉を持たない者――即ち無職が存在する。どんなことをやらせても、並以下とされる者たち。発生条件は解明されていないが、覆しようの無いレッテルだった。

フウタはそれを覆したかった。無職だからと弾かれ、省かれ、社会の隅に追いやられて静かに果てる、そんな同じ〈無職〉をフウタは何度も見てきた。だからこそ努力によって出来ることがあるのだと証明したかった。

フウタは、自分の才に気が付いたのだ。どんな人の動きでも真似られるという才能に。

しかし奇抜な発想や豊富な話術があるわけではないから、道化師にはなれない。

大道芸で稼ぐには、人としての魅力が物足りない。傭兵となると、〈職業〉による適性試験を突破出来なかった。癒師としても、騎士としても、立ちはだかる試験が邪魔をした。

だから、登録だけなら誰でも出来る闘剣士は、打ってつけだと思った。

闘えば勝つ自信があったのだ。けれど。――現実は違った。

本職の〈闘剣士〉には華があった。――フウタには、無かった。

個性のないパクり野郎が、神聖な戦いの場で調子づいている――そう、唾を吐かれた。

フウタは強かった。負けることはなかった。だがそれだけだ。どれだけ戦っても人気は付いて来ない。人気がなければ、闘剣士たる資格はない。強ければ良いわけではなかった。

「あ……チャンピオン！」

一人寂しく、選手専用通路を控室に向かって歩いている時だった。声をかけてきたのは、フウタへの挑戦権を賭けて争っている選手の一角である、鎗使いの少女。

黒髪をツーテールにした活発な印象の彼女は、勿論フウタとは異なり絶大な人気を誇る闘剣士だ。

「えと……相変わらず常勝じゃん。今回はダメだったけど、次は私が挑戦するから。必ず。だから、覚悟してなよ？」

突き付けられた言葉は、いつもと同じ。無気力に一瞥すれば、彼女は嘆息した。

「まあ、眼中にないかもしれないけどさ。見てろよ、ちくしょう……！」

彼女の顔に浮かぶのは僅かな落胆と、それから向上心だろうか。一度溜め息を吐いて、それから気合を入れ直したように顔を上げ、手を振って去っていく。

それを見送って、フウタは思い返す。彼女とは、いつか一度手合わせをした。それからは、いつか公式戦でフウタを倒すのだと、息を巻いている様子だった。ああ、まったく。羨ましい限りだ。職業〈闘剣士〉として生まれ、人気を博し、毎日歓声を浴びて闘っている彼女のことが。明日への希望を胸に駆けていく彼女とは対照的に、背を丸めて自らの控室へと引っ込んだフウタは、部屋に入るなり大きく溜め息を吐いた。

どうすれば、〈無職〉でも胸を張って生きていけると、証明出来るだろう。

悩みは日に日にますばかり。いつも控室で、答えの出ない問いに頭を抱えていた。

助けを求める友も居なければ、生真面目さゆえに逃げることも出来なかった。

「やあ、フウタ選手。少し話があるんですが、いいですかね？」
部屋に、このコロッセオの〈経営者〉が顔を出したのはそんな時だった。金に光る入れ歯を見せびらかすように笑みを浮かべ、男はフウタの隣に腰かける。そして馴れ馴れしく肩を組んだ。議題は、どうしても伸びないフウタの興行収入について。
「分かってるでしょう。どんなに強くても、人気は付いて来ないと。貴方がどれだけ考えても、良いアイディアは出ませんよ。アイディアを出せるような〈職業〉じゃないんですから。こういうのは、私のような〈経営者〉に任せれば良いんです」
〈無職〉を小馬鹿にされていることに気付けないほど、フウタは疲弊していた。
「強いばかりで華が無い。よく言われているはずだ」
頷く気力も出ないほど、言われ続けた言葉だった。
「――だからね。貴方に華が無いなら、試合に華を持たせましょうよ」
だからその甘言が――〈職業〉による話術の力だとすら気付けず。
まさしく天啓を受けたように、彼の方を見てしまった。
そしてその日、チャンピオン・フウタの在位記録に終止符が打たれた。

同日――彼はコロッセオから追放された。

第一話　たとえば俺が、チャンピオンから――

旅の果て――コロッセオを追放されてから二年。
フウタの姿は、祖国から遠く離れた王国の首都にあった。
この国まで来ると、フウタを知る者など最早いない。距離が遠いこともあるが、何よりこの王国には闘剣という文化が無いからだ。もっとも、もしフウタを知る者が居たとしても、以前とはかけ離れた風貌の彼をフウタと断定出来るかは難しいところだが。
伸び放題の髪と、粗雑にナイフか何かで切っただけの髭。
体軀は痩せ衰え、纏うボロ布は異臭を放っている。
これで〈無職〉とくれば、仕事を斡旋して貰えないのも当然だろう。
自分でも分かっていた。それでも王国の首都までやってくれば、非合法だろうと何だろうと、仕事の一つもあると信じてここまで歩いてきた。
だが、フウタは最早限界が近かった。視界は霞み、腹部より下は既に感覚が殆ど残っていない。飢えと、日照りによる脱力で、歩みを一歩進めるのもやっとだった。
――まだ意識がはっきりとしているのは、これまで積んできた鍛錬のおかげだろうか。
王都の隅にある裏通り。

昼から営業している酒場の店主は来店のベルに顔を上げ、フウタを見るなり舌打ちした。
「……金は持ってんだろうな」
金は持っていなかった。路銀はとうに尽きている。もしも善意で食料を恵んでくれるような店主なら、と仄かな期待はすぐに諦め、フウタは酒場の奥へと目をやった。
しかしてそこには、幾枚もの粗紙が貼られた掲示板があった。
「……おい兄ちゃん、聞いてんのか」
「仕事を。仕事をくれないか」
「仕事だァ？　……〈職業〉は？　まさか〈無職〉ってんじゃねえだろうな」
禿頭の店主は腕を組み、フウタを上から下まで眺めて呟く。ふらふらと店奥の掲示板まで足を運ぶフウタの肩を掴んで止めて、彼は告げた。
ここでも、〈職業〉だ。どの町でも、どの国でも、〈無職〉の扱いは粗略に尽きた。
この店でも仕事を断られたら、いよいよ自分は死ぬかもしれない。
ぼんやりと、それもまたいいかもしれないと思った。長い時間かけてすり潰された心。追放からの当てもない旅。うだるような熱と幾つもの悩みに、脳が溶けたように、死ぬことすら怖くなくなっていた。心が軽く麻痺を起こしていたと言ってもいい。
「――だとしたら、仕事は無いか？」

「マジで無職かよ。そっちの掲示板には無職なんぞにくれてやれる依頼はねえ」
その言葉に含まれた副音声は、すぐに分かった。
目に見えるところに出せない依頼なら、あるのだろう。
何が割に合わないのかは、ものによる。対価、日数、報酬、リスク。或いは――
「……話し相手になるだけで、三十万？」
「本当はこんな依頼、うちで預かるのも嫌だったがな。非合法のこういうの目当てにする、お前みたいなヤツの為の店を開いたつもりはねえんだ」
前金を受け取ってしまったからしかたない、と吐き捨てた店主が渡してきた依頼は、内容の割に高額な、所謂怪しい仕事だった。
当然違法だ。少なくとも、正当な依頼方法で出そうとしたら検閲で弾かれる。
だが今のフウタにとってはちょうどよかった。どのみち依頼を受けなければ死ぬだけだ。
「これを引き受ける。……その金で、飯をくれないか」
フウタの懇願に、店主は少しだけ嫌そうな表情を浮かべて呟いた。
「まぁ良いだろ。臭ぇ浮浪者にうちで飯食わせるなら、妥当な線だな」
食ったら即帰れ、と言って厨房に引っ込む店主。
「……ふぅ」

ひと月ぶりだろうか。ようやくまともな食事にありつける。涙が出そうになるのを堪え、フウタは改めて依頼書に目を通した。これからどんな目に遭うか分からない。

ただ、今は。

この依頼のおかげで命を繋ぐことが出来た感謝の気持ちで、胸がいっぱいだった。

†

その翌日のこと。少しだけ元気を取り戻して、依頼書を片手に約束の場所にやってきたフウタは、周囲を見渡して顔をしかめた。治安が放棄された区域とでも表現しようか。

指定された旧噴水広場という場所は、自分と同じように路上で生活するしかない者たちが住まう裏路地。やはり罠だろうかと疑いつつ、彼はゆっくりと歩みを進めていた。

そして。強烈な気配に顔を上げた。

噴水の前。静かに座す、フードを被った少女の姿。本来、こんなところに一人で少女が居ようものなら、たちまち飢えた人間の欲望の捌け口にされる。

だからこそ、異質に映った。

広場には、浮浪者の根城はあっても彼らの姿は一つもない。張りつめたような空気は、

まさしくコロッセオで感じた闘気そのもの。それも少女が発するそれは凄まじい。フウタが相手にしてきた最上級の闘剣士に勝るとも劣らない、静謐かつ鋭利な猛者の力の発露。

フウタは慌てて依頼を確認した。場所は合っている。相手の風貌は蒼のフードを被った軽鎧の人物。該当するのは彼女だ。だが依頼は果たし合いではなく話し合い。もとい話し相手だ。話し相手を請け負って来たのにこの空気感では、自分以外の受注者は逃げ出してしまうのではないか。素直に、フウタはそう思った。

あの、と。一歩、広場に足を踏み入れて声をかける。

瞬間、フードの角度が上がった。こちらから見える口元だけが、小さく弧を描く。

「依頼を受けてくださった方ですか？」

「ええ……まあ……」

フウタは面食らった。彼女の声は清涼で、可憐。張りがあり、聞き心地が良かった。

ただ、これだけの闘気を纏わせておいて、敵意の欠片も感じなかったのは、妙だ。

「どうかなさいましたか？」

「いや、その。依頼主さんを不快にさせるつもりはないのですが」

きょとん、と首を傾げる少女。フードがこてんと揺れた。

「これほど闘気が強烈だと、誰も近づけないんじゃないかなと」

コロッセオの猛者たちが日常的に纏っているものだから、フウタは気にならない。だが彼自身も、何度も何度も戦ってようやく慣れたのだ。いくらなんでもこんな場所に非合法の依頼を抱えて訪れるような人間に、この空気の中を歩いていけというのは酷だろう。

しかし、少女は彼の言葉がよく分かっていない様子だった。

「わたしから……闘気が？　そんなつもりはありませんでしたが」

「マジですか」

「結構、分かるものですか？　意外と出している本人は気づかないものなのでしょうか」

「一度しっかり訓練はしないと、漏れてしまうことはあるみたいです」

「なるほど、道理でここ数年、人に避けられていたわけですね」

ふむ、と顎に手を当てる彼女。しかし闘気が消える兆候は一切ないとなれば、フウタも彼女が無意識に出しているものだと結論付ける他なかった。

隣へ行って、少し考えて、離れて座る。と、少女はフードごとフウタに顔を向けた。

「あれ。……わたしの闘気って、そこまで離れたいものなのでしょうか」

「いやむしろ、こちらがしばらく不衛生だったので、臭うかなと」

フウタとしては気を遣ったつもりだったのだが、少女は首を横に振った。

「この場所がもう随分と臭いがきついので、今更です。気にしないでください。わたしが、

お話をしたくてここに来たのです」

「それはまた、奇特な……」

お話。果たして実際はどんな依頼なのだろうかと身構えてやってきてみれば、どうやら本当にお話のようで。フウタは目を瞬（しばたた）かせて、少しだけ彼女に寄って腰かけた。

噴水を取り囲む石の縁に二人。

「で、話というと？　依頼には、詳しいことが書いてなくて」

「そうなんですよね」

え、と困惑するフウタをよそに、彼女はまるで他人事（ひとごと）のようにそう言った。

「お互いに何も知らない間柄ではありませんか。そういう関係だから話せることもある、とアドバイスを貰ってやってきたのですが。いざ会ってみると、悩んでしまいますね」

「はぁ……」

そんな思い付きに非合法の依頼を――三十万などという大金を使って――出したのか。

この様子なら金に不自由はしていないのだろう。金持ちの考えることは分からない。

とはいえこちらは依頼を受けた身だ。話し相手になるという依頼である以上、会話が続かないというのは良くないだろう。話術に自信があるわけでもなければ、得意な〈職業〉でもないけれど。ありきたりの話でも、振らないよりはマシだろうと考えて。

まずフウタは、深く、頭を下げた。
「依頼、ありがとうございました。本当に」
大仰な礼に、少女は少し驚いたように口を開ける。
「いえ。そんなに、御礼を言われるようなことでは」
「貴女にとってはそうかもしれません。でも、俺にとっては違ったんです」
「……というと？」
フウタはぽつぽつと、この国に来るまでのことを語り始めた。
仕事でやらかして、職場を追放されたこと。
それから路頭に迷い、〈無職〉ゆえに仕事もろくにさせて貰えなかったこと。
ようやく、遠いこの国に辿り着いたこと。
「〈無職〉……なるほど」
小さく呟いた少女の言葉は、フウタには届かず。
「追い出される前は、どんなお仕事をしていたのですか？」
「闘剣士です。腕には、自信があったんですが」
「追い出されてからは、その腕を活かせるお仕事にも就けなかった、と？」
「ええ。資格に〈職業〉のふるい分けがあるのと――まあ〈無職〉でここまで剣の腕だけ

を鍛えていた人間もそう居ないでしょうから」
「です、か……」
少女は押し黙り、俯いた。
そっと唇を撫で、何かを思案したらしい彼女は、しばらくして立ち上がる。
「――良い、機会だったかもしれません」
それが何を意味する言葉かは、フウタには分からない。
立ち上がった少女をぼんやりと見上げることしか出来ない彼に、少女は振り返る。
「元闘剣士だと言うなら、手合わせをしませんか？　報酬は別途でお支払いしましょう」
急な提案に、フウタは面食らった。どういう意味かと意図を問う困惑の表情は、しかして彼女の柔和な笑みに封じられる。
「これを、運命と呼ぶかどうか。試したくなってきまして」
詩的な言い回しはフウタには理解出来なかった。金持ちは道楽にも全力なのか、程度のことしか考えられない頭では、彼女の言葉にロマンチックな返しをするなど不可能だ。
そういう〈職業〉でもないのだし、諦めて続きの言葉を待った。
「この依頼を出すのは何度目かになるのですが……そも、わたしの前に現れてくれたのも貴方だけでした」

「それはそうかもしれません」
彼女の闘気は、威圧感となって周囲を圧迫する。この辺りに寝ているような者たちでは、呼吸すらままならないだろう。確かにそういう意味では、依頼を受けたのがフウタでなければ、こうして会話することすら出来なかったかもしれない。
「その貴方が、〈職業〉によって苦しい思いをしたこと。遠い国からこの王都まで訪れたこと。……剣の腕が立つ、と自ら口にしたこと」
すらり、と彼女は一本の剣を抜いた。
エストック――中でもコンツェシュと呼ばれる刃渡りの長い刺突剣。
少女は、ほう、と上気した熱い吐息とともに、切っ先をフウタに向ける。
「以上がわたしにとって大事なことでした。あとは――貴方の腕がわたしの想像通りなら、という期待ですね」
目の前の少女の腕は、おそらくコロッセオの猛者たちに匹敵する。報酬は別途。依頼は手合わせ。断る理由は無い。小さく、彼女にも聞こえないくらいの声で、フウタは呟く。
「たとえば俺が、チャンピオンから無職にジョブチェンジしたとして――結局のところ、やることは変わらない」
観客は居ないけれど。フウタは、最後の闘剣に臨む気分だった。

これが最後と心を構えて闘えるなら、そんなに幸せなことはない。
「得物は、わたしの予備しかありませんが」
「それで構いません」
下ろされたコンツェシュを前に、フウタは立ち上がる。
「相手の使う得物が、俺の得意武器だ」
知れずフウタの瞳が闘剣士のそれに切り替わった瞬間、少女はフードの奥で身震いした。
「相手の使う得物が、俺の得意武器――ですか」
挑発と取ったのだろうか。彼女はフードを被ったまま、身じろぎすると熱い息を吐いた。
依頼主を不機嫌にするのは本意ではない。
困ったように眉を下げ、謝罪を口にしようとしたフウタだったが、彼女は続けた。
「……良い、台詞ですね」
「は？」
「言ってみたいものです、わたしも。そういうカッコいいの」
金持ちの考えることはよく分からない。はあ、と困惑したフウタは手元のコンツェシュを振るい、気持ちを改める。どうやら、彼女は機嫌を損ねたわけではないようだし。
「相手が降参と言うか、寸止めで勝利。怪我をさせるつもりはありません。また、あまり

大声は上げないように。ここにわたしが居ることを、王都に知られたくありません」
「……よく分かりませんが、分かりました」
「理由が分からずとも従う。そういうことが出来る人間は大変好ましいですよ。では」
彼女はそう言って、軽く距離を取った。少女が構える。フウタも、同じように構えた。
――静まり返る時は一瞬。
「始めましょうか」
ブレるように彼女の姿が消えた。かさり、と小さく石畳をこする音がする。
小さく頬に微風。気配は下。フウタは反射的にコンツェシュを喉の前に構える。
火花。金属音。瞬きする間もなく、彼女はフウタに肉薄していた。
連撃。繰り出される刺突は正確で、次々に人体の急所を狙い穿たんと押し寄せる。
その全てを、同じコンツェシュの刺突で牽制する。
突き刺し、引く。その動作の弱点は一呼吸必要になることもそうだが、それ以上に続ければ続けるほど速度が落ちるというものがある。
攻めあぐねたのを察した刹那、すぐさま少女は跳び下がった。
「ふふっ」
「……俺は貴女のお眼鏡に適いましたか？」

笑み。フウタも分かっていた。
これはただの挨拶だ。見知らぬ相手がどれほど戦えるのかを調べる戯れ。
うっかり殺してしまわないかどうか。相手がどこまでついて来られるのか。
剣の、会話だ。
「さて、どうでしょう……これからですよ」
「……はい」
ふわり、風のように少女は掻き消える。
次の瞬間、右から気配――否、背後。鈍い音と共に振り返り、フウタは呟く。
「コンツェシュの魅力は、刺突剣でありながら長い刃による薙ぎ払いも可能であること。背後から相手の頸を薙ぐくらい、造作もないということですね」
「避けるので精一杯と思いましたが、振り返った上で受けますか。それはそれは――」
――余裕ですね、と。そう呟きを残して、少女はまたしても掻き消える。
この消え方も、魔術によるものではないとフウタは理解していた。
緩急。その極限。緩慢に見せる動作と機敏な動作の繰り返し。それが人の瞳を惑わせ、消えたように見せるのだ。小柄な少女であるからこそ、より抜群の性能となる。
だが、もう、〝理解〟した。――フウタの瞳が、金色に変わる。

背後に現れた彼女が下からコンツェシュを突き上げるようにフウタを狙った。
ステップバックからの刺突や薙ぎ。――知っている。
対象の視界を惑わせ攻撃を狙うスタイル。――知っている。
我流が染みついているが、おそらくはどこかの正統な流派の手ほどきを受けた美しい技。
――知っている。
「くっ……攻めきれませんか！」
少女の熱が上がってきた。
一、二、三、四。刃の閃きは的確にフウタの急所を狙う。
その全てを受け流され、少女は一度足を止める。
「……既に想像以上で、もう、正直試しとしては合格なのですが」
「ですが、というと？」
「ちょっと、楽しくて困りましたね。――全力で行きます」
言うや否や、彼女は乱雑にフードを脱いだ。
フウタは驚いた。わざわざ身分を隠していただろうフードを自分から脱ぎ捨てたのだ。
その先に居たのが銀世界のような髪を靡かせる絶世の美貌を持った少女とくれば、動揺もする。だがすぐにフウタも表情を戻した。

彼女は実に獰猛な笑みを浮かべた、生粋の武人であったから。
《宮廷我流剣術：雨》
繰り出されたのは、必殺とも呼べる彼女の技。宮廷で学んだエストックの剣術を改良した、コンツェシュによる篠突く雨のような刺突の連撃。
手先が二十三十にも増えたように錯覚させるほどの最速剣技は、スプレッドのように拡散し敵を穿つ。――だがそれすらも知っている。
フウタは、彼女の連撃を、全く同じ動作で迎え撃った。
《模倣：ライラック・M・ファンギーニ＝宮廷我流剣術・雨》
フウタは――模倣の達人だった。
ただ模倣するだけではない。相手の持つ鍛錬の軌跡を瞬時に写し取る。相手がどんな鍛錬をしてきたか、どんな相手と戦ってきたか。その上で、どんな戦術を編み出してきたか、その軌跡を模倣する。その模倣を、コロッセオで相対した戦士の数だけ行ってきた。
故に、最強。故に、無敗。
相手の軌跡を模倣するそのさまを見て、観客は嘲笑った。
信念のないパクり野郎、と。
だが、誰も土を付けることは出来なかった。最後の最後、八百長による幕切れまで。

たとえ、チャンピオンから無職にその身を落としたとて、彼の今まで持っていた、歴戦の猛者たちの軌跡までは失わない。

遠く離れた国の王都にあっても、闘い方は変わらないのだ。

そしてまた一ページ。

目の前の少女という猛者が、彼の得た軌跡に加わるだけのことなのだ。

狙うは背後。彼女と同じように緩急を付けて掻き消え、死角から急襲する。

「っ――あああ！」

コンツェシュによる斬撃はしかし、少女の超反応によって弾かれた。

驚いたのはフウタだ。しかし、なるほどとも思う。

彼女の力量であれば防げなかったであろうこの一撃。――しかしどういうわけか、彼女は背後や真上といった、所謂死角に対する反応だけは異常だった。

別に、才能がどうこうというわけではない。単に、彼女が死角に対する反応を鍛錬し続けているという努力の賜物だ。

何故かは、分からないが。分からなくても、構わない。

ならば、真正面から打ち倒すだけのこと。

《宮廷我流剣術：雨》を放ち切ったその瞬間、彼は続けざまに打ち放った。

《宮廷我流剣術：雷霆》

彼女が放っても居ない、彼女の技を。阻む全てを突き抜ける刺突の一撃を。

「うそっ」

連撃を放ったままに突き抜けてくる刃は、彼女の喉ぎりぎりでぴたりと止まった。

《雨》によって弾かれた少女のコンツェシュが、からん、と地面に転がった。

静かに俯き、震える少女の口から、ぽつりと漏れる言葉。

「こっ……」

「こ？」

「こんなに楽しかったのは初めてです！」

蒼く美しい瞳を輝かせ、少女はコンツェシュを拾い抱いてそう言った。

「それは、良かったです」

依頼主に満足して貰えたなら、それ以上に有難いことはない。

別途報酬も入るという話だし、闘いを通してこんなに喜んで貰えたのも初めてのこと。

自然と眦が下がり、口角が緩んだ。どれほど酷い目にあったとしても、昨日ありつけたご飯に救われた。そして、自分の磨いてきた技で、喜んでくれる人が居た。

これは、他の誰にも分からない、フウタだけの感動だったのだ。

もう少し生きてみようと、思うくらいには。
「……やはりこれは、運命なのやもしれません」
少女の漏らした言葉に、フウタは顔を上げる。いったい何のことだろうか。
「試しは、上々。いいえ、最上級のものだった。貴方という剣士は、無職でありながら、ここまでの実力を練り上げ……わたしと出会った」
紡ぐ言葉は流麗で、詠う声色は美しく。
まるでおとぎ話の姫君のように、彼女はフウタに手を伸ばす。
「貴方を、当家の食客として招きましょう。条件は、わたしの望む時にこうして鍛錬を共にすることのみ。その他、衣食住の全てを保障します」
とんでもない条件が聞こえたように思えて、ついフウタは聞き直した。
え、と声を漏らすフウタに、彼女は頷く。
彼女の望む時に鍛錬に付き合えば、それだけで衣食住が保障される。
「……良いんですか」
「貴方の価値をわたしが見込みました。他の者に否は言わせません」
断る理由はない。どのみちフウタに今後の当てはなく、生きていく保証も無い。
だがあまりに条件が良すぎて困惑しているのを、どうにも渋っているように思われたよ

うで。少女は、フウタの手を取って問いかけた。
「難しいでしょうか。入用でしたらお金はわたしの出せる範囲で幾らでも出しましょう。欲しいものは欲しいと言っていただけたら、すぐに手配します」
「や、いやいやいや。そんな恐れ多い」
「恐れ多い？」
首を傾げる少女の、銀世界のような美麗な髪が揺れて、陽光に照らされて光が迸る。
フードを被っていなければ、最初からこのように小首を傾げる度、美しい風景が広がっていたのだろう。
フウタは、そんな見当違いなことを考えて呆けていた。
「恐れ多いだなんて、今更ですよ。なるほど、貴方を縛っているのは遠慮ですか。ならばこちらも、慮る必要はありませんね」
「へ？」
ふわりと髪を払い、少女は自らの胸に手を当てた。
「わたしはライラック・M・ファンギーニ。この王国の第一王女にして、都の政を預かる者です。――ふふっ」
少女は楽しげにフウタを指さす。

「貴方は王女に剣を向けたんですよ？」
「そんな脅しがありますか⁉」
「わたしに遠慮して渋るくらいなら、脅した方が早いというものです。いにしえの騎士のように、わたしに忠誠を誓うロマンチックな文言が紡げるというのであれば、それが一番良いのですが」
王女だとか。剣を向けただとか。色々と言いたいことはあるけれど。
それでもフウタは頭を掻いた。今更の話だ。
もう、地獄ならとうに越えてきた。
こんな嬉しい提案を、相手が望んでしてくれるというのなら。
人生で一度くらい、幸せを願っても良い。
「フウタと言います。……気の利いたことは言えませんが」
「伴侶となるわけでもなし。それで構いませんよ――フウタ」
冗談めかして笑う少女の表情は、とても可憐で美しかった。

第二話　今日から俺は王女のヒモ？

「まさか、王女様だったとは……」

「王都に来て間もないならば、知らなくとも無理はありません」

意気揚々と、楽しげな笑みを添えて彼女――ライラックはフウタの隣を歩いていた。

フードを改めて被り直した彼女と共に路地裏を進んでいくと、共用墓地に出る。

一角に生える柳の下が、王城と王都を結ぶ隠し通路の一つなのだとか。部外者に教えていいのかと問えば、彼女は微笑むだけ。この程度の秘密であれば話しても問題ないとでも言いたげな、恐ろしい笑顔だった。

藪をつついて蛇を出す必要は全く無い。この話は止めにして、別の話を振ろうと考える。

「第一王女様がこんな出歩いていて良いんですか？」

「ダメですね。ましてや貴方に非合法の依頼を出していたなどと知れたら、ふふっ」

フウタは微妙な笑顔で応えるにとどめた。これも拙い話題だった。

段々分かってきたことではあるが、このライラック王女はかなりの曲者であるようだ。

可憐な容姿、麗しい美貌。王女として素晴らしい素養を持っているのは分かる。

が、中々にアグレッシブでアクティブで、そして頭が回る。

フウタを罠に嵌めようと彼女が思おうものなら、翌日には処刑台に乗せられてそうだ。

「〈職業〉が〈教師〉でもない相手とわたしが城外で刃を交えた時点で、どんな言い訳を並べても厳罰でしょうし。なので、わたしと剣を交えたことは内緒ですよ？」

口元に人差し指を持ってきて、小さくウィンク。ふとした仕草が絵になる少女だ。

彼女は共用墓地の大樹の下にやってくるなり、木の表面に偽装した板を取り外すと、洞の中へと入っていく。そして手だけが伸びてきて、こいこいとばかりに手招きする。

「いきますよ」

洞の中はそのまま地下に降る梯子になっており、ライラックはぴょんと飛び下りる。

生返事をしたフウタが続いて降ると、彼女は立てかけてあった松明を手に取った。

慣れた様子で歩き始めたのは、真っ暗で狭い通路だった。

ひたすら暗闇が広がっている通路の、幾つもの曲がり角や階段がある中を、松明片手にさくさくと曲がったり下りたり上ったりして進んでいく。

道中、彼女は思案するように口元に指を当てた。

「――貴方が強い闘剣士であることの証明が急務ですか」

「証明、ですか」

「身なりを整え、わたしの食客だと紹介したとして。〈無職〉である以上、『どうして貴方

が強いことを知っていたのか』という話になります」
「どこかで見た、とかではダメなんですか？」
「それは良い案ですが……わたしが単独で動いていることを悟られるのも嫌なのです」
「なるほど」
つまり、『王女だけが知っている凄腕の闘剣士』では弱い。
そうなると、とフウタは少し考えた。闘剣士のチャンピオンであったことを言えばいいのではないかと。だが、それはつまり八百長したような男を招致したということになる。
八百長だけを伏せても、いずれ露見する。――提案だけ、してみるべきだろうか。
そんなことをぐるぐるとフウタが考えていると、ライラックは軽く手を打つ。
「まあ、いいでしょう」
「王女様？」
「すぐに貴方の強さを証明する機会を作ります。それまで賓客としてお過ごし下さい」
何かを企んでいるような、そんな眉根の寄り方だった。
フウタに対して悪意はないのだろうが、若干の空恐ろしさを感じる。
あまり波風を立てるのが得意ではないフウタは、ふと気づいた。
「逆に、証明しなくても良いというのは？　貴女さえ、俺の腕を知っていてくれれば」

「――無いですね」
即答だった。
「単純に、ただの食客として置きすぎると外側への風聞が悪いのと……あと、貴方との鍛錬をこそこそ隠れてやらなければならないのは、面倒です」
「そ、そうですか」
では、どうしたものだろうか。何か彼女に協力出来ることはあるだろうか。
思案するフウタをその蒼の瞳で一瞥して、ライラックはくすりと微笑む。
「大丈夫です。貴方はゆるりとおくつろぎください。条件に変更はありません。わたしの方で、全部片づけておきますから」
わたしの方で全部片づけておく。この字面から感じる怖さは何だろうか。
とはいえ、フウタに何かが出来るわけでもない。
自分のことを全て任せる心苦しさはあるが、ここは甘える他無いだろう。
「宜しくお願いします」
ええ、と頷いた彼女は鼻歌交じりに、上機嫌さを隠そうともせず地下道を闊歩する。
「……そういえば」
思い出したように、ライラックは顔を上げた。隣り合う二人はそこそこの身長差だ。

自然と上目遣いになり、松明に照らされる美麗な相貌にフウタは息を呑む。
「今のうちにお聞きしたいのですが。わたしの剣を全部受けきったのはともかく……最後のは偶然ですか？」
「最後、というと」
「わたしの得意技なんですよ。あの刺突」
ライラックが指した最後とは、きっと《宮廷我流剣術：雷霆》のことだろう。
確かに彼女からしてみれば、偶然にも同じ技を使われたに等しい。
だが違う。軽く頭を掻いたフウタは、気まずそうに口を開いた。
「信じられないかもしれないんですが……俺、相手の戦い方は全部分かるんです」
ただ目を丸くするのみの少女に、フウタは続ける。
「どういう技を使えるのかとか、そのためにはどういう動きが必要かとか。で、再現出来るので……コロッセオでも、相手と同じ武器で戦ってました」
彼女も、ずるいと言うだろうか。この戦い方だけが魑魅魍魎の跳梁跋扈するコロッセオで、フウタが唯一渡り合えた方法だった。結果として無敗のチャンピオンにまで到達したその実力は、しかしペテンだパクりだと唾を吐かれた。
「では、最後も。わたしが放ってもいない技を模倣したと？」

「そういうことになります」
「なるほど……」
思案するように、口元を人差し指でなぞるライラック。
フウタは、知らず生唾を飲み込んだ。
卑怯だ、要らない。などと言われてしまえば、結局放逐される。それが嫌だというわけではない。もう慣れた。ただ、一度は認めてくれた人に突き落とされるのは、辛かった。
考え事をするライラックの真剣な表情は、鋭い。フウタを賞賛していた時の天真爛漫な顔とは打って変わって、熟練の為政者のような風格を醸し出す彼女が熟考すればするほど、フウタの緊張は高まった。が、思考の終わりは唐突に訪れた。
「――え、最強では？」
鋭利な表情はどこへやら。
きょとんと目を瞬かせて、ライラックはフウタに目をやった。
「……信じてくれるんですか？」
「ここでわたしに嘘を吐くリスクを考えたら、真実一択です。そんなとぼけた返答が聞きたいのではありません」
「あ、はい」

ぴしゃりと彼女は言葉を切る。
「貴方はそんな力を持っていながら、闘剣士として放逐されたと？」
「……そう、なります」
ライラックは至極、胡乱なものを見るような瞳でフウタを見つめる。
「経営者は人間でしたか？」
「人であることすら疑われるんですか⁉」
「控えめに言って理解が出来ませんね。少し頭をひねれば、貴方の強さを利用して幾らでもコロッセオを盛り上げることくらい……」
ぶつぶつと、ライラックは首を傾げて呟く。
「俺が、凄く弱かったとかは考えないんですか？」
「あり得ません。コロッセオで弱者であったなら、〈無職〉の貴方が腕に自信を持つことなど不可能なはずです」
「それは、おっしゃる通りで……」
それに、と彼女は続けた。
「貴方は強かった。剣に、たゆまぬ鍛錬の跡が見られた。どんなに模倣の力があったとて、自らの力量が追い付いていなければ、ああもわたしの技を真似することなど出来ません」

「――っ」
「剣を交えたわたしの言葉です。胸を張り己を誇りなさい、フウタ。コロッセオが貴方をどう思おうと、わたしは貴方の研鑽に敬意を表しています」
最後に、ふわりと微笑んで、ライラックは「もうじき王城です」と背を向け歩き出した。
一瞬、フウタは動けなかった。否定されなかったこと、ずるいとも、卑怯とも言われなかったこと。そしてなにより。生まれて初めて、人に努力を認めて貰えたことが。
心から、嬉しかった。
「……フウタ？」
「す、すみません、ぼうっとして」
足を止めていたことを訝しがられたらしい。振り向いたライラックが首を傾げる。
「満足な食事も取れていないと言っていましたね。城に着いたら手配しましょう。さあ、ここを登れば王城ですよ」
何やら勘違いされたが、流石に恥ずかしくて訂正は出来なかった。
最後に彼女が指し示した長い梯子を上り切ると、豪奢な部屋の暖炉に繋がっていた。
ライラック曰く、既にここは王城の塔にある部屋の一つ。
流石は王城というべきか。手入れが行き届き、装飾も美麗な部屋だった。

「とりあえず貴方には客室を与えたうえで、身の回りの世話が出来るよう、メイドを付けようと思いますが……」
そう言ってライラックは一度フウタを上から下まで眺め、困ったように微笑んだ。
「客人として招くにあたり、少し身だしなみを整えて貰いましょうか」
「……すみません」
王女ともあろう人が、今まで表情一つ変えず共に居てくれたことの方が奇跡だった。
伸び放題の髪と髭。纏うボロ布は異臭を放っている。自分は鼻が麻痺してしまっているが、本来こんな部屋に居て良い装いではないと、フウタは肩身の狭い思いだった。
「服装も含めて、考えなければなりませんね」
「お手数をおかけします……」
「いえ。貴方を滞在させる対価としては、些細なことです」
あっけらかんと、美しい髪を払って彼女は言う。随分とフウタを買っているような台詞に、流石の彼もそろそろ歓喜より困惑が勝ってくる。
「嬉しい話ではあるのですが……何のために俺にここまでしてくれるんですか」
「ああ。ごめんなさい。条件ばかりを口にして、目的を伝え忘れていましたか。確かに、不審に思われるのも無理はありませんね」

くす、とライラックは笑う。
「――本当にただ、頻繁に手合わせを願うだけです。ちょっと最強になりたくて」
「強くなるために……。職業〈教師〉の人間ではなく、俺を？」
「ええ、貴方が良い」
真正面から『貴方が良い』と言われて、一瞬フウタはたじろいだ。
安心してください、とライラックは続ける。
「貴方に求めるのはわたしとの手合わせのみ。〝契約〟を交わしてもいい。期限は貴方が城を出たいと望むまで。わたしとしては、そんな日は来ない方が好ましくはありますが」
噴水広場での打診と変わらない。より具体的になった条件提示。
ただ、フウタにとって疑問なのはそこではなかった。
「どうして、貴女は最強になりたいのですか？」
「――」
問いに対する返答は、ただの微笑みだった。それはもう、にっこりと。語らずとも瞳が言っていた。――聞くな、と。
「……ああえっと。俺が、何か力になれたらと」
決して彼女の機嫌を損ねたいわけではないフウタは、さっと言葉を濁した。

「フウタに求めるのは、わたしとの手合わせのみ。詮索は不要です」
「……分かりました」
踏み込み過ぎたか、と自戒していると、ライラックは優しく諭すように告げる。
「いずれ、お話しすることもあるかもしれません。ただ、それは今ではない」
そうですね、と、思いついたように指を立て、悪戯っぽく彼女は続けた。
「貴方に出来ることは、そう。わたしが、わたしの全てを話したくなるくらい、ずっと期待させてください」
「期待、ですか。……貴女は、俺に何か期待をしていると？」
彼女はフウタの問いに頷いて、一度目を閉じた。胸に手を当て、謡うように紡ぐ。
「――人間は〈職業〉の奴隷ではない。貴方は身をもってそれを魅せつけてくれました」
その言葉に、フウタの息が詰まる。
「今後も、そうあって欲しいと……わたしは期待しています」
最後にフウタに微笑み、彼女は柱時計に目をやった。――時刻は昼を回ろうとしていた。
「わたしは午後から政務がありますので、その間は自由に寛いでいてください。身の回りの世話はメイドに頼んでおきますので」
「この部屋に居れば良いですか？」

「ええ。外出を止めたりはしません。ただ城に戻れなくなると厄介なので、その際は必ずメイドを付けて、という形でお願いすることにはなりますが」
「分かりました」
「ありがとうございます。それでは――ああ、そうそう」
ライラックは部屋を出ようと豪奢な両開きの扉に手をかけ、思い出したように言う。
「貴方に付けるのは、わたしが一番信頼しているメイドです。彼女を通じて、他の王城関係者からちょっかいを掛けられるようなことは無いはずですからご安心ください。ただ」
そう少し思案したのち、彼女は困ったように眉を下げた。
「そう、ただ。ちょっぴり癖の強い子なので、寛大な心で相手をして下さると幸いです」
その言葉を最後に、ライラックは部屋を出ていった。
颯爽とした背中を見送って、フウタはしばらくの間立ち尽くしていた。
一人になってようやく湧く実感とでも言おうか。むしろ、夢見心地と言うべきか。
去年の自分どころか、昨日の自分に言っても信じては貰えないだろうこの状況。
現実逃避というわけではないが、ぐるりと周囲を見渡して、ふと思った。
「……メイドさんが来るらしいとはいえ。俺をここに放置して良いんだろうか」
暖炉が通路になることは分かっていて、扉に見張りも居ない。調度品はどれも高価な印

象。それも、コロッセオの経営者執務室よりも随分と上品だ。大物小物問わずいわゆる〝金目のもの〟しかないような場所に、浮浪者同然の男を一人ここに残したのは、セキュリティに自信があるからか、或いは。

「……別に、盗まれても構いません、ってことなのか？」

盗むつもりは無い。彼の中にライラックを害する考えは一切浮かばなかった。

内心で彼女が何を考えていたにせよ、彼女はフウタにとって恩人であり、欲しい言葉をくれた人であり、生まれて初めて模倣の力を知って尚フウタに期待してくれた人でもある。

そんな人に背を向ける行為は、何一つする気が起きなかった。だがそれはフウタの気持ちであり、ライラックから見て分かることではないはずだ。

だから、フウタは首をひねっていた。

その時だった。

「うちの姫様は、相手が信用に足るかどうかくらい一目で分かるってことですよー」

何故か窓から顔を覗かせる金髪の少女。

まず目に入るのは、くるくると巻かれたツインテールと、頭に付けたホワイトブリム。

ここは三階のはずなんだがとフウタが悩むよりも先に、パルクールのように窓枠を飛び越えて入ってくる――メイド。そういえば、メイドの癖が強いとか、なんとか言ってたな、

とフウタはここでライラックの言葉を思い出した。

「何故窓から……？」

「そりゃ、怪しまれないようにですよっ」

「いえ、滅茶苦茶怪しいのですが」

よっこしょーっと、と、風呂敷を背負った姿はまるで泥棒か何かのようだ。

「午前中に掃除を終わらせているはずの、主人不在の部屋に入る可愛いメイド。そんなの誰かに見られたら怪しーでしょ？　でしょでしょ？」

「な、なるほど？」

「スケジュール管理は王城管理側でやってますからねー。見咎められて、たとえば調度品の一つでも無くなってたら全部メイドのせいになりますよ、お前のせいでっ」

びし、と指を突き付けて彼女は言った。

「え、俺？」

「そりゃそーですよー。姫様が内密に招いた客人の世話ですよ？」

「ああ、じゃあ貴女が……」

満面の笑みに、Ｖサイン。ウィンクまでかまして、ぺろりと舌を出した彼女は言い放つ。

「はいっ。お騒がせお掃除メイドのコローナちゃんです、ぴっ！」

なるほど、とフウタは頷く。――確かにこれは、癖が強い。
何故か空中にジャブを打ちながら、コローナと名乗ったメイドは続ける。
「お前がここに一人放置されたのは、それでも大丈夫って思われてるってことですよっ。信頼の証、受け取っていけー？」
「そ、そうですか……」
「あ、敬語とか要らねーですよ。年下のメイド敬ってどーするのお客様。お前の世話をするために、メイドはひょっこりやってきたわけですっ」
「そ、そうか。じゃあそうさせてもらうよ」
歳の頃は十五、六程度。背負っていた風呂敷を絨毯の上に広げていく彼女に、フウタは圧倒されていた。プレッシャーは間違いなくライラックの方が強いはずなのに、何だろうか。この少女の自由な雰囲気は、生真面目なフウタにとっては毒だった。
「姫様には何か言われましたー？」
「何か、っていうと？」
「姫様が戻るまで部屋の隅でガタガタ震えて待ってろとか」
「いや言われてないけど……どんなお姫様なの、それ……」
「ツッコミが弱っちいぞっ。ま、何も言われてないならとりあえず、その悲しい見た目を

どうにかするところからですかねー」

憐れむような目を向ける彼女。急に現れた彼女のテンションについていけず、フウタは困惑する。歳が幾つも離れていることもある。会話下手な自分に付けられたことへの申し訳なさも相まって、なんとなく居心地が悪かった。王女様に命じられたこととはいえど、年頃の少女が浮浪者まがいの人間の世話をするなど、さぞかし苦痛ではないだろうかと。

「……俺は何をすればいいかな？」

「背丈が二メレト無いくらいか。でけぇですねー。じゃあこれとこれ持って、シャワーにお入りなさいませー。髭剃りと爪切りも渡しておくから、お前の考える限り最高の美男子になって、この部屋戻って来ると良いですねっ」

フウタが色々気を遣っていることなど、メイドは全く気付いていないようで。

ぽんぽんぽん、と服やら下着やら石鹸やらを両手に載せられ、そのままフウタは部屋の隅にある扉まで押し込まれた。

「え、ここ王女様のシャワールームじゃないの⁉」

「わざわざシャワーしに、今の格好のフウタ様が王城うろちょろする方がリスキーです。いってら。手取り足取りメイドが洗ってあげてもいいけど」

「分かった分かった、入る入る。一人で」

「そですかー。残念。メイド結構好きなんですけどね。錆びた包丁をぴかぴかにするの」

「そのメンタルで一緒に入られたら何されるか分からないから……」

全身の毛を剃ってぴかぴかにされかねない。

押し込まれたフウタは、服を脱いでシャワーを浴び始めた。脱衣所とバスタブがカーテンで遮られた、そこそこ広い贅沢なシャワールームだった。

ポンプを動かせば、ざーっと音がして水が流れる。勿体なく思ってしまうのは、自分の今までの生活を振り返れば仕方のないこと。久々に身体を洗い流す感覚が心地よく、お姫様のシャワールームを使わせて貰っている罪悪感と相まってとても複雑な気持ちだった。

瞬間、カーテンが勢いよく開いた。

「脱いだ服は捨てるつもりですけど、思い入れあったりするー？」

「どぅわびっくりした⁉　シャワー中だよ⁉」

「知ってますけど。シャワー中は無言の戒律でもある宗派？」

「いや、うん。もういいや。……捨ててくれて構いません、はい」

「ほいほーい」

「あ、でも待ってくれ」

「んー？」

カーテンを閉めようとしたコローナが振り向く。
「俺が捨てておくよ。こう言っちゃなんだけど、凄く臭うし」
「いーですよ別に。お前はお客様で、メイドはメイドですし。あとこういうクッサいの、何か変な気分にハマれて案外嫌いじゃないですよっ」
ちょっと頬を染めてコローナが言った。
「はぁ⁉」
「冗談ですよっ。何照れてんですか」
すぐさまジトっとした目で見つめてくる彼女に、フウタは空を仰いだ。
女の子にからかわれる耐性がまるでなかったのだ。
「……冗談ですからねっ？」
「何で念を押したんだ⁉　逆にちょっと、おい！」
しゃ、とカーテンを閉められる。
感情がしっちゃかめっちゃかにされて、大きく息を吐いたフウタ。色々気を遣っているこちらの気も知らないで、と思った矢先に、また勢いよくカーテンが開く。
ひょっこりと顔を出したコローナが、人好きのする屈託のない笑顔で言った。
「そのくらいのテンションの方が、メイドとは付き合いやすくて良いですよっ！」

言うや否や、閉ざされるカーテン。
シャワーの水音だけが響く中、フウタはもう一度溜め息を吐いた。
――どうやら。気を遣うどころか、気遣われていたらしい。
「情けないな、俺は」
癖の強いメイドさんではあるけれど。仲良くなれると、仲良くなりたいと思えた。
髭を剃り、爪を切り、垢を洗い流して。全身を清潔にしたフウタは、与えられた上品なパンツと上着を纏って、シャワールームを出た。
「おー、微妙に美男子っ」
コローナは開口一番、そう言って拍手した。
「微妙にって言うなよ」
だからフウタはツッコミを入れた。
するとコローナは少し目を丸くして、ついで満開の笑顔とともに拳を振り上げる。
「いいぞー！　楽しくなってきやがったぜー、結構コローナちゃんもお前のこと見直しましたよ。見た目も一新したし。今日からニューフウタを名乗るとさらに良いですね！」
「やだよ、なんか凄いアホっぽいじゃないか」
にゅーふーた。伸ばし棒にすると余計にアホっぽかった。

「じゃ、まずその使い古した箒みたいなボサ頭をどうにかしていきますねー。座れー？」
ちょいちょい、と手招きした先には、風呂敷の上に置かれた椅子。
フウタが風呂に入っている間に散髪の準備を整えてくれたらしい。
言われるがままに腰かけると、上から散髪用の布を被せられた。
「さて、今日はどうしますかー？　メイドとお揃いにする？」
「ツインドリルはちょっと……。王女様に恥をかかせない感じにお願いします」
「おっとー、予防線の張り方がプロかー？　姫様引き合いに出されたら、メイド、真面目にやるしかないやつー」
ちょきちょきちょき、と慣れた手つきで散髪を始めるコローナ。
「ところで、どんな口説き方したんですー？」
ある程度、伸び放題の髪が整えられてきた頃に、コローナは言った。
一瞬何のことなのか分からず、フウタは首を傾げる。
「おい頭動くなー？　ぐさっといきますよ、何がとは言わないけど。……ほら、フウタ様って姫様の依頼でお話をして、気に入られたから来たんでしょー？」
そう言われて気が付いた。ライラックは彼女にも、剣を交えたことは伏せていると。
「姫様好みの気の利いた台詞が出てくるわけでもなさそうだし？　〈職業〉が〈癒師〉系

統のカウンセラーってわけでもなさそうだし。フウタ様の〈職業〉は何ですかー？」
「〈職業〉、か」
彼女にとっては、ただの世間話のつもりなのだろう。だが、フウタにとっては違った。
――職業が無いというのは、この世界では身分証明が無いことと同義だ。
発展途上のこの世界において、劣等種を救済するほどの余裕は未だ無かった。
弱者救済よりも、明日の発展。
人間が歯車として消費されていく社会において、既製品に当てはまらないパーツは排除した方が手っ取り早かった。そうして、〈無職〉は排除され続けた。
曰く。人間は目に見える異端を攻撃し、種を守る為に彼らを排除する習性があるという。
劣等種を後の世に残さないという本能なのか、或いは自らよりも下に居る人間を見て安堵したいという心の欲求なのか、いずれにせよ。放浪の果てに現れた小汚い〈無職〉など、人々にとっては羽虫か玩具かのどちらかに過ぎなかった。
フウタが思い返すのは、これまでの人生で何度となく交わしたやり取り。
『〈無職〉に渡せるような仕事はここには無いよ』
『ご職業は？　……〈職業〉が無いんじゃ斡旋は無理だねえ』
『〈職業〉も無いのに何しに来たんだ？　冷やかしなら帰んな』

当たり前のことだと受け入れて諦めて、王都まで這う這うの体で辿り着いたのだ。
そして今彼女に問われた。職業は何か、と。
少し仲良くなりかけたこの少女が、どんな反応をするのか分からない。
ただ、ライラックと彼女の関係が深い以上、いずれ露見する話ではある。
フウタは素直に答えることにした。
「〈無職〉だよ」
排斥の対象、人間としての底辺。そういう意味で捉える人間が普通の世の中だが、ライラックといい、コローナといい、普通ではないらしい。
「んー。じゃあ分かんないや。ヒント無いんですか、ヒント」
「え、ヒント？」
「姫様が気に入る要素が見当たらないじゃないですかー。〈職業〉じゃない、見た目じゃない、なら性格がドンピシャで好みだったとかー？」
さらりと、それなりに勇気の要る言葉を流されたフウタ。どんな扱いを受けるか分からないからこそ語気を強めたのにも拘わらず。コローナは、全く以て気にしていなかった。
「どしたんですかー？　ハトポッポが螺旋魔導弾食らいまくったみたいな顔して」
「ハトポッポ跡形も残らないよ、それ……。いや、キミは、〈無職〉如きが王女様の客に

なるなんて許さない、みたいなこと思ったりしないのか？」
「しないけど」
「しないのかー」
「しないなー」
ちょきちょきちょき。
「フウタ様が自分の〈職業〉のことどう思ってるかとか、実際どんな感じの人生歩んできたかなんて、メイドは知りもしないし興味もないですし」
先ほどまでと同じ、自由気ままなテンションのまま、コローナは言う。
「単純に、フウタ様は姫様の認めた客人ってだけですよ」
ふぁさり、と髪の束が落ちる。
「無職に会ったことはあるけど――メイド、フウタ様に会ったのは初めてなんで。よく分かんないけど、見た目とか職業で人を決めつけんのって、なんか違うでしょ」
「……そうか。ありがと」
「何で御礼言われるのか分かんないけど、メイドは言葉よりモノが好きです。感謝してるならご飯奢れー？」
「俺が稼いだら奢る奢る」

「お、約束ですよー。……ほれ、終わり」
渡された手鏡を見れば、コロッセオの頃と同じ、フウタの精悍な顔がそこにあった。
後ろから覗き込むコローナが、鏡越しに楽しげな笑みを見せる。
「最初会った時のひでぇ格好で遠ざけてたら、メイドはこのイケメンには会えてないわけですよっ。分かるかなー？」
「……ああ」
イケメンがどうこう、は、さておいて。
コローナが言いたいことは痛いほどよくわかったし、嬉しかった。
「やっぱり、ひでぇ格好だと思った？」
「あれでまともな格好だと思ってるなら、フウタ様はナルシストが過ぎますねっ！」

†

髪を切り、服装を整えた。そして。
「……美味しかった。ありがとう」
「あそこまで美味しそーに食べられたら、マナーがどうとか言いっこ無しですねーっ！

姫様と食べる時は気を付けろー？」
「あ、ああ」
「まったく、仕方ないやつめー」
部屋のサイドテーブルに所せましと置かれた食器。空になった鉄製の弁当箱をかちゃかちゃと片づけながら、コローナはけらけらと上機嫌に笑った。
昨日は、昨日の食事も最高だと思ったのだ。依頼の前金を全額払って、一月ぶりのまともな食事にありついたのだから、美味くないはずがなかった。
だが、今日の食事はまた格別だった。
「昨日と今日で、人生で一番美味しい食事の一、二位更新って感じだ……」
どんな人生だ、と自嘲するフウタだが、事実ではあった。
食べられることの幸せを、これほど実感したことはなかった。
「へー。ちなみにどっちが一位なんですかっ？」
気付けば、コローナの小さな顔がフウタを横から覗き込んでいた。
ぷらんぷらん、と彼女の二房の金糸が揺れる。
「今日のお弁当と昨日のご飯はどっちが一位なの？　場合によっては脛を蹴るぞっ？」
「なんで⁉　いや、難しいところだ」

「ほぉ？」
片眉を上げるコローナ。妙な強者感というか、貫禄を感じる表情。
「昨日の食事は……一月ぶりに食べたまともな飯だったんだ。王女様の依頼が無かったら食えなかったし、そのまま死んでたかもしれない」
「なるほど。で、今日のは？」
「今日のは、そうだな。うん。どう考えても味は今日の方が美味しかった。それに、その。別に一緒に食べたわけじゃないけど、コローナが居てくれたから、なんというか……」
「なんというか？」
「や、人と一緒のご飯って美味しいなと」
誰かと一緒に食べるご飯というものも、数年ぶりだった気がする。
コローナが目の前で食べていたわけではないにせよ。誰かと話しながら食事をするということそのものが、フウタにとっては幸せだった。
「――っ。そですか。ま、脛蹴るのは止めてあげますねっ」
「ありがとう……？」
「ふむー。そうするとあれですね」
コローナは目の前で腕を組んだ。そして、やたら悪い顔で嗤った。

「また一月絶食させて、今日のお弁当をメイドと一緒に食べれば記録は更新出来ると」
「勘弁してください」
「冗談ですよっ！　今のところっ！」
「とこしえに冗談であって欲しいんだけど！」
好きで絶食していたわけではないのだ。
「ちなみに、好みの食べ物とかあれば言っておけー？　頭の隅っこに置いてあげないでもないですよっ」
「え？　……その言い方だと、コローナが作ってるのか？」
「そですけど。当たり前じゃないですかー。わざわざ姫様がコローナちゃんを呼びつけた意味忘れたかー？」
「見た目を整えるまでは伏せるため、か。そっか、じゃあ話を聞いてからわざわざ作ってきてくれたのか。……その、壁をよじのぼって」
「もっと手放しで褒めれー？　頑張ったのに、なんだその、ちょっとヒイた顔はー」
「風呂敷背負って壁を上ってきたメイドさんは、ちょっとインパクトが強すぎてな……」
でも、とフウタは首を振った。
「わざわざコローナが作ってくれたのか。ごめん、訂正する」

「何をですかーっ？」
「一位は今日の弁当だわ」
まごうことなき本心だった。目が合ったコローナは少し驚いたように目を丸くして、ついでちょっと頬を赤くして、それから勝ち誇ったように口角を上げた。
「ふっ」
そして一度、空っぽの弁当箱に目をやってから、嬉しそうに言った。
「作り甲斐のある奴めー。次からはちゃんと配膳台で持ってきてやることにしますよっ」
「ああ。ありがとう」
心からの笑顔に、コローナはふと気付いたように問いかけた。
「ちなみにフウタ様の好きな食べ物はっ？」
「食べられるものなら、なんでも好きだ」
「……作り甲斐のない奴めー」
「えっ」
ショックを受けたフウタだった。
「それにしても」
食事から少しして。てきぱきとシャワールームの掃除を終えたコローナに、フウタはぽ

つりと呟くように声をかけた。
「俺は、何をしてればいいんだろう」
「ベッドに飛び込み姫様の匂いに浸るとかっ」
「変態じゃないか！」
「タンスをまさぐって姫様の下着を漁るとかっ」
「だから変態じゃないか！」
「まあ、この部屋って普段使いの部屋ではないので、ベッドに飛び込んでも姫様の匂いはしないしタンスに姫様の下着もありませんがっ」
「じゃあなんで提案したんだよ……」
「本気で飛び込んだり漁ったら言おうかなって」
「しねーよ‼」
はあ、と小さく溜め息を吐くフウタ。
「このまま待ってるのは全然かまわないんだけど、コローナが仕事してるのに俺だけぼーっとしてるのも心苦しくてさ」
「金縛りごっことかしてればいいんじゃないですか？」
「暇すぎる人間の極致みたいな遊びだな……楽しいの？」

「メイドは幼い頃に一度だけやったことがあって」
「あって？」
「今、あまりにも暇そうなフウタ様を見て思い出しました」
「もういっそストレートにつまんなかったって言ってくれていいよ……」
フウタは泣きそうな顔で肩を落とした。
「仕方ないですねー。趣味とか無いんですかっ？」
モップを掛けながら、コローナは首を傾げた。
趣味。趣味と言われて、フウタは自分の半生を思い返す。
時間があれば鍛錬ばかりをしていた。強くなれば報われるかもしれない。強くなれば。
今よりももっと強くなれば、コロッセオで歓声を浴びることだってあるかもしれない。
淡い期待を胸に、繰り返してきた。その鍛錬くらいしか、思いつくものが無い。
我ながらつまらない人間だと自嘲した。
「暇さえあれば鍛錬をしていたよ」
「ふーん。じゃあすれば良いんじゃないですか？　今、すんごい暇ですよ、フウタ様」
「すんごいとまで言われるとへこむな……。や、でも趣味ってもっと、料理だったり裁縫だったり釣りだったり、色々あるじゃん？」

「ありますねっ！　『さて、どう料理してやろうかぁ』とか、『その口を縫い付けてやるぜ！』とか、『ひゃっはー吊るし上げだー！』とか」
「コローナの周りの趣味人、凄い物騒だな……」
それぞれ、きちんと声をドスの利いたものに変えている辺り、芸が細かい少女だった。
「まあ、その中で鍛錬ってこう、無趣味な感じが凄いなと思ったんだけど……」
「思ったんだけど、なんです？」
頭にはてなを浮かべたコローナに、フウタは笑った。
「そうだよな。うん、鍛錬をしよう。させてくれ」
この少女は、随分と先入観の無い子だった。常識が無いとも言えてしまうが……そんな彼女の考え方にさっき救われたばかりだ。良いじゃないか、趣味が鍛錬であったって。
フウタにとって一番身近な時間の使い方が鍛錬なのだから、鍛錬をすればいい。
身体も長旅と飢えで衰えているのだ。しっかり戻したい。
なによりライラックはフウタに期待してくれている。恩人を失望させるようなことだけは、あってはならない。そう思い、身体を動かすべく部屋の中央に立った時。
ちょうど、扉が開いた。
「ライラック王女殿下の客人が居るというから来てみたが……」

扉の先には、十数人。目を瞬かせるフウタを置いて、先頭に立っていた青年が歩み寄る。
その後ろを、ぞろぞろと男たちが続く。先頭の彼ほど豪奢な服装ではないが、少なくとも上等な布を使った衣服を纏っていることは見れば分かった。
部下、或いは仲間。そう見るのが妥当なところだろう。
口を開いた青年は長身痩軀の緑髪碧眼。
フウタを上から下まで眺めてから、胡乱なものを見るような目で問いかけた。
「貴様、〈職業〉は？」
手に持ったステッキの石突をフウタに差し向けるさまは、警戒或いは探りの気配が感じられるものだった。警戒される理由に、心当たりは無い。
ならばフウタが何者かを特定したい、ということなのだろうか。
「〈無職〉ですが」
瞬間、どっ、と部屋が沸いた。出所は勿論、青年が引き連れてきた者たち。
おかしそうに腹を抱える者、フウタを指さす者、嘲りの言葉を並べ立てる者。共通しているのは、一様に〈無職〉を笑っていることだった。
「リヒター様。まさか殿下が無職を飼うとは思いませんでしたね」
「やはり杞憂です！　宮廷で誰にも相手にされないから平民を拾ってきただけですよ！」

「いやはや殿下も〈無職〉をわざわざ選ぶとは。奇特な方とは思っておりましたがね！」
す、とフウタの目が細まった。――不思議な感覚だった。
〈無職〉であることを虚仮にされたはずなのに、自分でも驚くほど傷ついていなかった。
嘲笑われることには慣れてもいた。コロッセオでは、何度小馬鹿にされたか分からない。だが、コロッセオの闘剣士が客に手を上げることなどあってはならない。
だから耐えることには慣れていた。けれど自分を虚仮にされたことよりも、初めて自分を認めてくれた恩人を笑われたことに、憤る自分が居た。
拳を握り、目の前の男たちの顔面に叩き込んでやろうと――その時だった。
フウタが凍り付いた。男たちも笑顔のまま固まった。
「うぉっしゅうぉっしゅ」
ごしごしと、何かを擦る音がする。出所はフウタの正面。
フウタも怒りを忘れ、貴族たちも言葉を失い瞠目した。おそらくはリーダーであろう、フウタと向き合っていた青年の顔面に――泡立ったモップが擦りつけられていた。
「リヒター様⁉」

「おのれ小娘、何を‼」
一瞬の間を置いて、怒号が響く。流石のフウタも言葉を零した。
「こ、コローナ⁉」
こんなことをやらかす下手人は一人しか居ない。今もってなおモップの柄を上下させる少女を呼び止めると、彼女は普段通りの笑顔を崩さずにサムズアップした。
「姫様の客に汚い口を利いたので洗浄。あと挨拶。おっすおっすみたいな。激ウマギャグ。うぉっしゅうぉっしゅ、貴族の人」
「いやいやいやいや‼」
慌ててフウタがツッコむも、遅い。
リヒター様、と呼ばれた青年はモップの柄をむんずと掴むと、強引に横へ投げ捨てた。
手元からモップが消えた無手のコローナに、泡立った顔面のリヒターが迫る。
フウタは背後で、彼女に危害が及ぼうものならすぐさま庇えるように構えてはいたが、リヒターは怒りを押し殺すように言葉を吐いた。
「……僕だけは、別にこいつを笑ってなかったのに」
「そうでしたっけっ？」
「そうだよ！！！！」

怒り心頭で顔を拭うリヒター。
「リヒター様に向かって、ただのメイドが何たる無礼を！」
「貴様、この国の法は分かっているだろうな。目上の人間に対し――」
震えるリヒターの後ろで、男たちが騒ぐ。
が、彼らを遮ったのもまたリヒターだった。
「やめろ‼」
「リヒター様⁉」
「……そのメイドは録術を使える。貴様らの発言は全て記録されているんだぞ」
「なっ、メイドが⁉　〈侍従〉如きが魔導術を⁉」
注目を浴びたコローナは、指先に光を灯らせた。そして、ゆっくりと空中をなぞる。
『リヒター様。まさか殿下が無職を飼うとは思いませんでしたね』
『やはり杞憂です！　宮廷で誰にも相手にされないから平民を拾ってきただけですよ！』
『いやはや殿下も〈無職〉をわざわざ選ぶとは。奇特な方とは思っておりましたがね！』
彼女の指先を起点に再生されるのは、先ほどの男たちの声。
「メイドさんは聞いている！　これが動かぬ証拠だー！　なんちて」
ふ、と指先の光を吹き消して、コローナは首を傾げる。

「てゆか。知っててメイドの前に馬鹿引き連れてくるとか、アホでは？」
「……貴様は王女殿下が一番信頼しているメイドだ。そんな奴を平民の客に付けるとは思わなかった。……それに、この時間は王女の執務室に居るはずだろう」
「ですねーっ！　正解した貴方にはストーカー検定二級をプレゼントっ！」
「要らん」
コローナはくるりとフウタを振り返り、悪戯っぽく呟いた。
「誰にも見つからないように、壁をよじのぼった甲斐がありましたねっ」
彼女のピースサインに、フウタも毒気が抜かれて溜め息を吐く。
「あの。それで俺に何の用ですか」
「用というほどの用はない。ただ、王女殿下が平民の男を連れてきたという話を聞き、見に来たというだけの話だ」
「この人数で？」
「ただの平民なら脅せる。卑しければ飼いならせる。……どちらも不発ではあったが」
人数で威圧すれば動きを牽制出来る。媚びへつらうようなら自分たちの駒として使える。
そう言い捨てて、リヒターは背を向けた。
男たちも慌てて帰りの道を譲るように脇へと捌ける。

フウタは顔をしかめた。別に、自分が利用されそうになったから、というわけではない。ただ、まるでこれは。

「貴方は、王女様の敵なんですか？」

「……そんな訳が無かろう。殿下は我々貴族の敬愛する王族。陛下の次に大切な方だ」

それだけ言うと、顔を拭いながらリヒターたちは部屋を出ていった。

「ふむー」

扉が閉まってからの沈黙を破ったのは、コローナの悩んだような呟きだった。

悩みにしては間が抜けていて、脱力感に襲われるフウタ。

「どうしたんだ？」

「姫様に限って、うっかりバレたってことはないのでー。多分もう出歩いて平気ですね」

「っていうと？」

「あいつらがフウタ様の存在を知ってるってことは、姫様が匂わせたってことですよっ」

「……つまり」

彼らがフウタの存在に気付いていたのではなく、ライラックがフウタの存在を匂わせた。

つまり、ライラックとしてはもうフウタが居ることを隠す必要がなくなった。

「あくまで王女様が主導でこうやった、と？」

「多分ねっ。あの貴族、誘導くらいはされてると思いますよっ」

「凄い信頼だな」

「まー、姫様ですしねー。……でも」

コローナはちらりとフウタの顔を見やった。

「そうなると結構全力根回ししてますね、姫様。どれだけ気に入られたんですかお前ー」

「そう、なのか？」

「あいつら動かしてるってことは、フウタ様を王城に認知させようとしてるってことですからねっ。姫様の愛情、受け取っていけー……いや、受け取らん方がいいかもだけど」

「よく分からないけど。でも気に入られたのだとしたら、ただただ嬉しいだけだよ」

「へー」

まるっきり興味がなさそうなコローナだった。

「てゆかフウタ様。〈無職〉めたくそに馬鹿にされましたけど、案外平気そうですねっ」

「そういえば、そうだな」

言われるまで気付かなかった。

どちらかと言えば、自分よりもライラックを笑われたことに怒りを覚えていたような。

「……まあ」

「ん？　メイドの顔になんか付いてます？　目とか？」
「逆に付いてなかったら怖いよ。じゃなくてさ。王女様とコローナが認めてくれたから、なんかもう、それで十分幸せなんだろうなって」
「ははー。欲のないやつめー」
　感心したようにコローナは頷く。
「そうか？　結構これでも欲張ってると思うよ。さっきもコローナがモップしてなかったら、全員殴ってたと思うしさ」
「そですか。じゃあメイド、お前の命の恩人ですねっ」
「えっ。なんで？」
「なんでって……流石にあの人数相手じゃぼこぼこのぼこにされますよー！」
「……あ、ああ。そうだな」
　うっかりしていた。ぼこぼこのぼこにされるかどうかはさておき。
　迂闊に手を上げた先で、王女の立場が悪くなることも避けなければならない。
　そういう意味では確かに、コローナは今回もフウタの恩人に違いない。
　とはいえだ。別にぼこぼこのぼこにされるつもりは無いとはいえ、この話題を続けると自分が剣を使えることがバレそうだと思ったフウタは、話題を変える。

「そういえばコローナは魔導術が使えるんだな」
「ほ？　あー、メイドとしてのお仕事に使えそうなものは一通りって感じですよっ！」
　たとえば、と言うや否や、彼女は部屋に用意されているベッドに飛び込んだ。
「んー、姫様の匂いー！」
「さっき、王女様の匂いなんてしないって言ってなかったか」
「憶えてやがったかこの野郎」
　真顔に戻ってベッドから飛び降りた彼女は、ベッドに向けた指に光を灯し、振るった。
「おお……ぐちゃぐちゃになった布団が一瞬で元通り」
「これも、さっきの声を記録するのと変わらないんですけどねー」
「……ベッドの形を記録しておいて、再生してるってことか？」
「お、フウタ様賢い！　記念に姫様の可愛い寝顔をプレゼントっ」
「反応に困る……」
　コローナが指を振ると、空中にライラックが現れた。といってもサイズは手のひらほどで、ベッドの中ですやすや眠っている――まさしく記録だ。
　可愛かった。
「こ、これって貰ったり出来るのか？」

「出来るわけないじゃないですか。メイドの魔導術ですよっ」
コローナが再度指を振ると、掻き消えた。
「そうか……」
「鼻息が荒くて最高に気持ち悪いですねっ。姫様ストーカー検定四級に認定しますっ」
「不名誉な！　鼻息も荒くねーよ！」
小馬鹿にしたような顔で笑うコローナ。
「ま、でもこれ撮った瞬間に姫様起きて、『何をしているのですか』とか言われてめためたに怒られましたけどねー。ちょっちちびった」
「言わなくていいから、そういうこと」
コローナが使える魔導術については理解が出来た。
しかしそもそも、魔導術とは限られた〈職業〉にのみ許される技のはず。
「コローナって〈侍従〉じゃないのか？」
メイドや秘書、或いは護衛など、誰かの為に働く〈職業〉の代表といえば〈侍従〉だが、〈侍従〉に魔導術は使えない。
そう思って問いかけたフウタに、コローナはけらけらと笑った。
「メイドが〈侍従〉に見えますかっ。メイドが、〈侍従〉に、見えますかっ。仕える主の

客で遊ぶような〈侍従〉がどこに居るって言うんですかっ！　あはははは！」
「それ自分で言うんだ」
「〈侍従〉ってのは、誰かに仕えることで自分の力を最大限に活かせる系の人ですよっ。人をモップで磨く〈侍従〉なんて居ないんじゃないですかねっ」
「さっきから自虐なのか自嘲なのか分かんないな……」
「メイド、全然自虐とか自嘲とかしてませんけどっ」
「じゃあ少しは悪びれろよ！」
お腹を抱えて笑い転げるコローナに、流石に頭を抱えて叫ぶ。
『……僕だけは、別にこいつを笑ってなかったのに』
あの台詞を聞いた時だけは、彼に同情したことを思い出したフウタだった。
「……じゃあ、コローナの〈職業〉ってなんなんだ？」
その問いに、んー、と少し悩むように結んだ金髪を弄った彼女は、悪戯っぽく言った。
「メイドの好感度がもう少し上がったら教えてあげますねっ」
「なんだそりゃ」
「ヒントだけあげますよ。人で遊ぶことでしか人生楽しめない可哀想な〈職業〉ですっ」
「それはコローナの素だろ……」

「ぺろりんっ」
あざとく舌を出したコローナに嘆息して、フウタは頭を掻く。
「でもなんか、あの人はキミのことを凄(すご)く警戒してたな」
「あの人って……ああ、もっぴー？」
「モップしたのはコローナだし、最高に不名誉だからやめてあげような、その渾名(あだな)。ええっと名前なんだっけ。リヒターさんか。彼は何なんだ？」
「もっぴーはねえ」
「もっぴー言うなっつの」
「……まあ、いわゆる貴族派の筆頭ですよっ。結構偉いっ」
「貴族派ってことは、他にも色んな派閥があったりするのか」
「王宮に限らずどの世界もそうだと思いますけどねー。モップされた人は姫様ともバチバチにやり合ってますよっ」
「そんな人にモップしたのかよ」
「ぺろりんっ」
コローナの無礼講が許されるのは、ひとえに魔導術のおかげだろう。
フウタも、彼女が魔導術を使えるなどとは知らなかったし、あのタイミングで気配を消

して、彼らの暴言をすかさず記録する辺りは抜け目ない。
『貴方(あなた)に付けるのは、わたしが一番信頼しているメイドです。彼女を通じて、他の王城関係者からちょっかいを掛けられるようなことは無いはずですからご安心ください』
ライラックが信頼している理由が、少し分かった気がするフウタだった。
「姫様も敵が多いので、結構大変だと思いますよっ。特に今、国王陛下が不在だし」
「どこかに出かけているのか？」
「なんかどっかの国の偉い人とお喋(しゃべ)りみたいですよーっ」
「会談ってことか……」
「その説もある」
「それしかなくない？」
王国の細かな事情は、フウタには分からない。派閥、利権、多くの思惑が絡(から)む戦場には、フウタの出る幕はないだろう。ここはコロッセオではないのだから。
「俺に出来ることは無いのかな」
「無いと思いますよーっ。少なくとも今のところはー、余計なことすればするほど悪影響じゃないですかねっ。ほら、男飼ってるとか、絶対そういう噂(うわさ)立ちますし」
「……」

「かと言って、城を出てくとなると姫様の本意じゃありませんしねっ」
「そうか。歯痒いな、少し」
「お前は真面目ですねーっ！　何もしなくていいバンザーイ！　でダメなの？」
そう問われて、フウタは少し考えた。コロッセオでは、頑張れば頑張るほど酷い目にあった。今回も、頑張ったところで空回りになるかもしれない。
自分の恩人に迷惑はかけたくない。
「でも、恩は返したいんだよな……」
「じゃあ、そんな迷える子羊にラムチョップ！」
「アドバイスな。それ子羊死んじゃうから」
「姫様に恩返しをしたいなら、期待に応えることですよっ」
「期待？」
おほん、とコローナは咳払い。
「すんごいぶっちゃけると、姫様は助けなんて要らないんですよねっ」
「そうなのか？」
「そりゃ一人で城作るとか無理ですけどっ。でも例えば姫様が城作ろうって思った時には、もう城の材料集め終わってて、部下に『やって』って言うだけで済む感じなんですよっ」

「なるほど。計画力が凄いんだな」
「そそそ。目的が出来た時には計画が終わってる、みたいな。そういうおっかない人なんですよっ。だから、姫様に恩返しがしたいなら――」
「王女様に頼まれたことを全力でやる、と」
「そゆことです、よく分かりましたねっ」
「目的が出来た時には計画が終わってる。そんな王女様が、俺に何かを頼んでくれたってことは、王女様一人じゃ手が届かないからってことか」
「そーゆー時しか、お手伝いさせてくれないんですよねー、あの人っ」
腰に手を当てて、やれやれとコローナは首を振る。
「でもそれだけに、姫様のお願いってやる気出るんですよねっ」
なるほど、とフウタも理解した。思い出すのは、ライラックの言葉の数々。
こちらで全てやっておく、という彼女の言葉はつまり、本当に〝全部〟のロードマップが彼女の中で構築されているということで。
そんな彼女に、手合わせだけは強く求められているのだ。貴方が良い、とまで言って。
コローナと話をした後だと、余計にライラックの言葉が響いてくる。
「だからお前も話すだけなんて、とか思わずに全力で姫様の話し相手全うしていけー？」

「あ、……そうだな」
そういえば、話し相手ということになっていた。
「これだけ話して、その軽い反応は何事か。謎を解明するためメイドは厨房へ飛んだっ」
「いや、軽くは――ってどこ行くんだ？」
だ、と部屋を出ていこうとするコローナを呼び止める。
すると彼女は呆れるように振り向いた。
「厨房って言ったじゃないですかっ！　お前の美味しいご飯記録、すぐに更新してやるから震えて待っておけー？」
「あ、ああ。ありがとう」
「てひひ」
最後にはにかんで、コローナは部屋を出ていく。
気が付けば、窓の外は既に日が沈みかけ、高い天井にはぼんやりと灯が点っていた。
暗闇に反応して明かりの付く鉱石。高級品だと知ってはいたが流石は王城というべきか。
当たり前のように備え付けられていた。
嵐が去ったように静まりかえった部屋で、フウタは一つ息を吐く。
朝、依頼人であるライラックと出会ってから、今日一日は本当に目まぐるしかった。

彼女と手合わせをして、王城に招かれることになって。初めて、努力を認めて貰えた。
コローナと出会って、あれこれと世話をして貰って。色々と心を救われた。
今日は、そう。おそらくは人生で最も。
「……良い、一日だった」
だからこそ、この恩は忘れないと、フウタは胸に誓った。
そんな時だった。静かに、それでいてはっきりと響くノックの音。
はい、と返事をすると、開いた扉の先には凛とした少女が立っていて。
「昼前ぶりですね。今日一日、この時間が待ち遠しかったです」
そう柔らかく微笑んだ。部屋に入ってきたライラックは、フウタをまじまじと見つめる。
「……あれ？」
そして出会った時と同じように、こてんと首を傾げた。
「王女様。お昼ぶりです」
「ええ……そうですね」
「どうかされましたか？」
「いえ。随分と見違えましたね。コローナは化粧に精通しているわけではありませんから
……必然、それが貴方の素顔ですか」

「そんなに思考の過程を踏まずとも素顔ですが……」
ふむ、とライラックは頷き、その青い双眸でフウタを見つめて言った。
「カッコいいではありませんか。ええ、わたし好みです」
「あ、どうも……」
「そこはもう少し気取った台詞が出ると、よりわたし好みですが」
今朝も言われた台詞だった。フウタは小さく肩を落とす。
「気の利いたことが言えなくてすみません……」
「伴侶となるわけでもなし。それで構いませんよ。欲張りすぎました」
柔らかく微笑む姿は、慈愛という言葉がよく似合う。
さて、と周囲を見渡して、ライラックは続けた。
「コローナは夕食を作りに戻りましたね？」
「ええ、先ほど、それはもう凄い勢いで。足元に車輪が幻視出来るくらい……」
実際、ぴゅー、という効果音と共に駆けていったような、そんな具合だった。
ライラックは笑いをかみ殺したように口元を押さえる。
「王女様？」
「いえ……仲良くなれたようで、ほっとしました」

「それは……」
フウタは今日のことを思い返して、目を閉じた。
「全部、コローナのお陰です」
しみじみと思う。彼女でなかったら、ここまでフウタの心は持ち直していなかっただろうと。その実感が伝わったのか、ライラックも目じりを下げる。
「そうですか。何よりです。あの子を付けた甲斐がありました。癖は強い子ですが、これからも仲良くしてあげてくださいね」
「はい。癖は強いですが、本当に有難い子でした」
既に、癖が強いというのは共通認識になっていた。
と、ライラックは窓の外へと視線を移して呟く。
「――彼女に言われたのです。少し、無関係の人間と話してみてはどうかと」
「なるほど。それでコローナも、話し相手がどうの、という話は知っていたわけですね」
「ええ。そして、依頼を出してみて。結果として貴方と会えた」
満足そうに頷き、振り返る彼女にフウタは問いかけた。
「……その、話し相手には何を求めていたんですか？」
すると彼女はきょとんとして、首を傾げる。

「さぁ？」
「えっ」
「貴方の前でする話ではありませんが、結局のところ迷走していたのですよ。自分のするべきことが分からなくなっていたと言いますか。だから、コローナのよく分からない提案にも、とりあえず乗ってみたといいますか」
そこまで言って、ライラックは俯き気味に小さく笑う。
「数度不発に終わって時間の無駄になりました。ふふふ」
「こわい」
「なんですって？」
「何でもありません、はい」
がば、と顔を上げた彼女から、フウタは目を逸らした。時間の無駄に終わった直後のコローナは、きっとライラックと顔を合わせるのも怖かっただろう。
次に会ったらもう少し優しくしてあげようと思うフウタだった。
「とはいえ貴方と出会えたことで全て帳消し、むしろ圧倒的に得ですから心配無用ですよ。迷う理由もなくなりましたから、既に〝話し相手〟など求めていません」
「そ、そうですか」

もしも話し相手も必要なようであれば、と思ったフウタだったが、どうやらそれは無用な様子だった。彼女の願いは、変わらず一つ。
「ですから、わたしが今最も求めているものは分かりますね、フウタ？」
フウタは真剣に考えた。
「……気の利いた台詞でしょうか」
ライラックは軽くこけた。
「そ、れ、は……まぁ、努力するというのであれば歓迎します。確かに、貴方に対し足りないところを指摘するならそこでしょうとも。ええ」
額に手を当てて目を閉じる。珍しく、ライラックが困っていた。
「個人的な努力を要請しているわけではなく、今わたしが一番欲しいものです。貴方に求めていることではなく、わたしが世界中で一番求めていること。はい、なんでしょう！」
手のひらを差し出され、言葉を委ねられ、フウタは考えた。
世界で一番、ライラックが欲しがっているもの。
「た、たとえ力及ばずとも……あー」
「？」
「粉骨砕身する覚悟を持ち、えーっと、貴女に忠義を誓う……」

「？？？」
なんか喋り出したフウタに、ライラックの頭に浮かぶ大量の疑問符。
「……その、強い、力？」
最後にはフウタにも疑問符が生まれた。そこでライラックはようやく察した。
「あ、さては貴方、気の利いた台詞のセンスは最悪ですね⁉」
「――っ⁉」
「露骨にショックを受けない！　ただの事実です！　もう！」
一生懸命気の利いた台詞でそれっぽくかっこいいことを言い、ライラックに喜んでもらおうというフウタの目論見は脆くも崩れ去った。
ライラックは怒りと羞恥に頬を染め、叫ぶように言う。
「わたしが今一番求めているものは‼　貴方との手合わせです！！！」
「あっ」
「あ、ではありません‼　馬鹿ですか⁉」
「いえ……世界で一番とは思わず」
「自分の実力に胸を張れと、今朝言ったばかりでしょう‼　どんな〈教師〉よりも貴方が良いと、わたしは言ったはずです‼　変なところで卑屈になるな‼」

「は、はい！」
「恥じるのは貴方の壊滅的な詩文センスだけで宜しい！！！」
「⁉」
ぴしゃりと言葉を締められ、フウタは凹んだ。
「……そんなに、ダメでしたか」
「剣の腕を買っていることに喜ぶより、詩文へのダメ出しに気が行くのですか。貴方は」
呆れるライラックに、フウタは申し訳なさそうに首を振る。
「王女様が、気の利いた台詞を求めていたものですから」
「はー……」
するとライラックは腰に手を当てて、大きく嘆息した。それはもう、盛大に。
「良いですか、フウタ。確かに聞き心地の良いカッコいい言葉が、わたしは大好きです」
「はい」
「わたしが、つい癖のように口にするものだから、貴方は気にかけてくれたのでしょう。それについては、感謝します」
そこまで言ってから、ライラックは少し目を逸らす。
「ですが、忘れないで欲しいことがあります」

「……なんでしょう」
「百の気の利いた台詞より、一度の貴方との手合わせを、わたしは望むということです。どんな詩人が現れ、わたし好みの詩文を紡ごうと、貴方との時間を失うくらいなら全員解雇します。分かりましたか？」
フウタは、噛みしめるように頷いた。そんなフウタを一瞥して、ライラックはもう一度目を逸らした。流石に照れが入ったのか、頬が朱に染まっている。
「もう、二度と口にしませんから、胸に刻んでおくように」
「は、はい。……ですが」
そんなに、自分との立ち合いに価値があるとは、思ってもみなかった。
と、フウタは思う。だって、ただ一度の手合わせをしただけだ。
それだけで、彼女はフウタの価値をこれだけ高く見積もったということなのだろうか。
「そんなに、価値があるとは――」
「フ・ウ・タ？」
「は、はい！」
こめかみに青筋を浮かべて、ライラックは微笑んでいた。
「二度は言わないと言ったばかりですが？」

「申し訳ありません」
やれやれ、と呆れるようにライラックは呟く。
「剣の腕には自信があるのでしょう？　それをどうして誇れないのでしょうか」
「……それは」
フウタは、小さく言葉を零した。
「俺の剣で喜んでくれたのが、貴女が初めてだからです」
それは、純然たる事実であった。驚くライラックに向けて、フウタは続ける。
「本当なんですよ。努力を認めてくれたのは嬉しかった。けれど、他はやっぱり戸惑いの方が強くて。すみません」
「仕方のない人ですね」
呆れたように、ライラックは目じりを下げた。
「ならば何度でも貴方と試合うとしましょう。どれだけわたしが貴方の剣に惚れ込んだか、今から教えてあげます――剣を執りなさい」

†

――王都城下、庭園。
群青に星々が輝く夜、フウタとライラックの姿は庭園の広場にあった。
ここは王族の私有地で、ライラックの手により人払いは済んでいるとのこと。わずかに人の気配はしたものの――彼女は、それを些事だと言ってコンツェシュを構えていた。
「良いんですか？」
「ええ。楽しみましょう」
「王女様がそうおっしゃるなら、全力で」
フウタはライラックと同じようにコンツェシュを手に取る。
瞬間、風が放たれるかの如くフウタの空気が変わった。
それが闘気と呼ばれるものであることを、ライラックは今日知った。
「……良い、心地です」
ライラックは一度瞳を閉じ、噛みしめるように言った。視界が遮られていても分かる、正面に立つ男の気迫。自分よりも熟達し、洗練された剣技を持つ男の気力。
目を開き、コンツェシュを振るう。
「――はじめましょうか」
「はい。いつでもどうぞ」

立ち上がりは今朝とまるで同じだった。
ブレるように掻き消えたライラックが、死角から風を纏って刺し穿つ。首を傾け紙一重で回避したフウタを、逃がさないとばかりにコンツェシュが薙ぎ払われる。
突きに伸び切った剣が無造作に横一閃。
響くは鉄。弾けるは火花。自らのコンツェシュで受け止めたフウタは、そのままいなすように剣を薙ぐ。利き腕とともに剣を払われ、バランスを崩したライラック。
しかし、くるりと背を向けるように回転。続く二撃目を、勢いのままに突いた。
体勢は悪いが、この速度でリカバリーしたライラックの剣は、そうそう受けきれるものではない。現に、この国の人間相手には絶対に放つことが出来ない技だった。
対応しきれず、為す術もなく倒れてしまう。だから、ライラックは口角を上げた。
「――涼しい顔をするものです」
微動だにせず、一瞬で狙われた喉元にコンツェシュを合わせるフウタ。
防戦に回らせたこの刹那、畳みかけるようにライラックはコンツェシュを振るっていく。
刃を交える音が響く響く響く響く――。飛び散る火花に臆することなど欠片もあり得ず、むしろその火花すら使って目を晦まし、自分に有利な状況を生み出そうとする獣のように。
《宮廷我流剣術：雨》

手先が二十三十にも増えたように錯覚させるほどの最速剣技は、スプレッドのように拡散し敵を穿つ。雨と名付けたのは、雨を全て避けるような人間はこの世に居ないから。

だが、とライラックは、相手と視線を交差させた。

――貴方は、違うのでしょう？

《模倣：ライラック・M・ファンギーニ＝宮廷我流剣術・雨》

ガガガガガガ、と鈍い音が一瞬に、篠突く雨のように響き渡った。

「ふふ、あはは！」

――楽しい。朝、フウタと初めて試合った時もそうだった。自分の全力に、全て応えてくれるような剣の応酬。今までのライラックの研鑽を肯定し、あまつさえ、まだ〝上〟があるのだと教えてくれるその能力と技量。

ライラック・M・ファンギーニという少女は、この王国にあって最強の剣士だ。

誰も彼女に敵わなかった。そして彼女の持つ闘気と高貴なる者の威圧。強い精神と高い教養が合わさって、誰もが彼女を遠ざけた。何一つ、敵いっこないと彼女を避けた。故に、彼女はあらゆる努力を一人で進めた。

剣技に限らず、ありとあらゆるものへの研鑽は全て一人だった。だからだろう。たった一つ、剣技という枠組みにだけ、フウタという〝格上〟が現れてくれたことに歓喜した。

思わずあの時、身を隠すための外套を、邪魔だからと放り出してしまうほどに。

半身を反らしてライラックの刺突を難なく回避したフウタは、そのままコンツェシュを振り上げた。拙い、と背を投げ出すように横転して回避。

振り下ろされるフウタのコンツェシュが空を切る。

「ちょ、王女様⁉　そんな、地面を転がるなんて」

目を見開くフウタに、ライラックは髪を払う。

ふぁさり、とその銀世界のような髪が夜の星々に反射して煌めいた。

「あとでシャワーを浴びますから、どうとでも」

「俺の認識が間違いじゃ無ければ、王女様ってもっと髪とか大事にするものだと」

「確かに貴方の見解に相違はありませんが……」

コンツェシュを改めて構え、ライラックは告げる。

「優先順位は先ほど言った通りです。ここで全力を出す方が、正しい」

すると、フウタは小さく溜め息をついてから、顔を上げた。

覚悟が決まったような、そんな表情。

「……分かりました」

「分かりましたか」

「ええ、ですので」
コンツェシュを構えるフウタの瞳が、爛（らん）と輝く。
「――全力でお相手しましょう」
瞬間、溢（あふ）れんばかりの闘気。
それを一身に浴びて、ライラックは震えた。恐怖ではない。武者震いかと言われれば、部分的にそう。引き絞られるような、強い威圧――それが、痛いほど心地いい。
歓喜の情、とでも言うのが一番近い。朱に染まり上気した頬。幸い、夜の闇に紛れてフウタには見えないだろう。熱く息を吐き、改めてライラックは構えた。
これだから、たまらない。
目の前のフウタの姿が掻き消えた。彼は全力だと言っていた。なら、ライラック同様、本気で剣を振るうはずだ。ライラックはその場でコンツェシュを、背後に振り抜く。
鈍い鋼の音が、静かな夜に響き渡った。
「よく弾きましたね、王女様」
「気配を察するのは得意なのです」
背中に感じた気配通り、フウタのコンツェシュが閃（ひらめ）いた。
それを払うだけで、びりびりと手に震えが走る。

「ならば――これでも、受けなさい‼」
《宮廷我流剣術：雷霆（グリジュモッド）》
閃く刃は雷の如く。至近距離で放たれる、腹部付近から貫くように喉元へと迫る刺突。
「見えていますよ」
《模倣：ライラック・M・ファンギーニ＝宮廷我流剣術：雷霆》
フウタの放った一撃は上から。下から突き上げたライラックとぶつかり合い、はじけるように反動で下がる。――痺（しび）れる腕が心地良い。
「……はぁ、はぁ」
息が上がっていたことにすら、気が付かなかった。
運動量、スタミナの管理も覚束（おぼつか）ないほどに没頭していた。
「……楽しい、では、ありませんか」
自然と、彼女の口角が上がる。呼応するように、ぴくりとフウタの眉が動いた。
「貴方と剣を交える度、自分の至らない所、届かない所が手に取るように分かる」
ライラックはフウタを貫くように剣を突き出した。――それも、彼によって弾かれる。
「これはどうか、これはどうか、どんなことを試したとて、貴方の牙城（がじょう）は崩れない」
「それは」

フウタは口を挟もうとした。崩れない牙城は、楽しめるのかと。甦るコロッセオの記憶が言う。お前の戦いはつまらない、と。だが、目の前の彼女は違ったのだ。

「――だから、崩してみたい‼」

剣を振るう。フウタが弾く。振るう、弾く、振るう、弾く。

「いつか。絶対に。崩してみたい！　貴方の剣は、そう思わせる！」

「俺の、剣が」

「ええ。貴方を、貴方の剣を超えた先に無限の達成感がある。そう感じる。だから！」

ライラックの手から、コンツェシュが弾かれた。

フウタのコンツェシュが、彼女と全く同じ技で以て、打ち払ったのだ。

からからから、と地面を滑るコンツェシュを眺めて、ライラックは息を吐いた。

「――今宵はこれまで。ですが何度でも。貴方と立ち会っていたい。分かりましたね？」

そう、儚げな笑顔で紡がれる彼女の言葉。まだ実感は湧かなかったけれど。それでも、彼女の気持ちは剣を通じて伝わった。

「分かりました。俺で良ければ、いくらでも」

「よろしい」

そう、互いに笑みを見せて。――初めての逢瀬は、終わりを告げた。

第三話　少し不思議で、少し献身的で、少し投げやりなメイドさん

――深夜。王城。ライラック・M・ファンギーニ第一王女私室。

水面に口元まで沈め、バスタブの中で一人、ライラックは思案に耽っていた。

「〈無職〉の剣士、フウタ……ですか」

そっと目を閉じる。

ライラックは、〈職業〉というものについて、以前から一人、分析を続けていた。

職業にはそれぞれ強みと発動条件がある。その殆どが、才能の一点特化を助長している。

〈闘剣士〉ならば、強いことではなく、勇壮なる戦い。――発動条件は、他者との闘争。

〈侍従〉ならば、何者かに対する奉仕の心。――発動条件は、奉仕すべき対象の存在。

〈経営者〉ならば、事業に対する広角的理解。――発動条件は、経営すべき事業。

それぞれ、与えられた〈職業〉に就くのが幸福だとされていた。

ライラックはそれが気に入らなかった。

人間は、〈職業〉の奴隷ではない。

職業で得られる才を利用して初めて人間である。だからこそ〈闘剣士〉でないにもかかわらず、あそこまで剣技を練り上げたフウタは好印象だった。

そして、もう一点。
〈無職〉という職業について、ライラックは以前から注目していた。
その名の通り、何の才能もない出涸らしだとされている職業。
本当に、そうだろうか？
職業が無いのではない。わざわざ〈無職〉という職業を与えられたのだ。
ならば必ずそこに、何等かの才能が眠っているはずだ。それがライラックの結論だった。
〈無職〉が活躍した話など殆ど存在しないものだから、参考資料にも手間取っていたが
――今、目の前に生きた〈無職〉が居る。
それも、あれだけの技量を持つ剣士と来た。
「……フウタには、言いませんでしたが」
ちゃぷり、とバスタブの湯から両足を出し、ゆっくりと組む。
ライラックにとっての、思考のルーティーン。
「最も運命的だったのは、何も知らぬまま努力を続け、あそこまでの力を手にした貴方と
――〈無職〉に可能性を感じていたわたしが出会ったこと」
彼は知らず知らず〈無職〉を利用し、自らの実力を磨き続けてきた。
ならば、自分がその才を見つけ出すことが出来れば。

「わたしが世界を変える一助に、必ずなってくれるはず」
ふふ、と小さく微笑(ほほえ)む。
「だから、フウタには申し訳ないのですが」
――逃すわけにはいかない。どんな手を使ってでも。

続きは、8月20日発売のファンタジア文庫で！

©Yu Aifuji, Shimofuri（Laplacian）2020